

---

# Weiner の達成関連感情に関する 帰属理論の背景と展開

奈 須 正 裕

---

本研究は、学業達成場面における学習者の感情経験（達成関連感情：achievement-related affects）を正面から扱った唯一の試みと目される B. Weiner の帰属理論（Weiner, 1974, 1979, 1986；Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Rosenbaum, 1971；Weiner, Russell & Leaman, 1978, 1979）を取り上げ、その背景と展開過程を検討することを通して、Weiner 理論の特質、他の理論的立場との関係、研究史上の位置づけ等を明らかにしようとするものである。

## 1 Weiner 理論の背景

後述のように、Weiner 理論は、期待×価値モデルの枠組み、より具体的には Atkinson 理論（Atkinson, 1964；Atkinson & Feather, 1966）の枠組みを、Heider に端を発する原因帰属理論の観点から再解釈し、発展的に継承したものと解釈できる。そこでまず、Weiner 理論の主要な二つの源泉である、Atkinson の達成動機づけ理論と Heider の原因帰属理論について、その概略を述べる。

## 1-1 Atkinsonの達成動機づけ理論

Atkinson 理論では、以下の三つの仮定が理論構成を支えている。

第1の仮定は、達成志向行動 (achievement-oriented behavior) は、成功への接近傾向と失敗からの回避傾向の葛藤の結果として生じるというものである。すなわち、最終的な達成傾向の強さ ( $T_A$ ) は、課題達成を促進する成功接近傾向 ( $T_S$ ) と課題達成を抑制する失敗回避傾向 ( $T_{AF}$ ) の合成傾向によって規定されると考える。これは、以下のように表される。

$$T_A = T_S - T_{AF}$$

この仮定には、Miller (1944) の葛藤モデル、Lewin, Dembo, Festinger & Sears (1944) の合成バレンス理論などの影響がうかがえよう。

Atkinson 理論における第2の仮定は、成功接近・失敗回避の各傾向が、それぞれ動機 ( $M_S$ ,  $M_{AF}$ )、期待 (主観的確率:  $P_S$ ,  $P_f$ )、価値 (誘因価:  $I_S$ ,  $I_f$ ) に関する個人の認知の乗算的關係によって規定されるというものである。これは、それぞれ以下のように表される。

$$T_S = (M_S \times P_S \times I_S), T_{AF} = (M_{AF} \times P_f \times I_f)$$

$M_S$  は達成要求または成功動機と呼ばれる。Atkinson (1964) は、“達成した時に誇り (pride) を体験できる能力”と定義するが、実際には TAT で測定された達成動機 (McClelland, Atkinson, Clark & Lowell, 1953) が用いられる。 $P_S$  は成功の主観的確率で、実験的には、課題の困難度に関する提供情報や、実際の課題の困難度の変化によって操作される。 $I_S$  は成功の誘因価を示し、具体的には成功時に感じられる誇りの感情が想定されている。

一方、 $M_{AF}$  は、失敗回避動機と呼ばれる。“目標が達成できなかった時に恥 (shame) を体験できる能力”と定義されるが、実際には Mandler & Sarason (1952) のテスト不安尺度を用いるのが一般的である。したがって、伝統的な手続きでは、 $M_S$  の測定には投影法を用い、 $M_{AF}$  については自己評定質問紙のスコアを充てることになる。 $P_f$  は失敗の主観的確率で、Atkinson は  $P_S + P_f = 1$  と考えられることから、 $P_f = 1 - P_S$  と表すことができるとしている。 $I_f$  は

失敗の誘因価を示し、具体的内容としては失敗時に感じられる恥の感情が想定されている。

第3の仮定は、誘因価と主観的確率の間には逆比例の関係があるというものである。これは、以下のように表される。

$$I_s = 1 - P_s, I_f = 1 - P_f$$

Atkinsonによると、成功の誘因価、すなわち達成時の誇りの感情は、容易な課題よりも、むずかしく成功確率の低い課題で成功した場合においてより強くなる。同様に、失敗の誘因価、すなわち失敗時の恥の感情は、むずかしい課題でよりも、やさしく失敗確率の低い課題で失敗した場合に、より強くなると考えられる。Atkinson & Feather (1966) は、輪投げゲームにおいて、標的から離れて立つほど成功した場合の賞が大きくなることを示したLitwinの実験をもとに、この仮定の正当性を主張している。また、Strodbeck, McDonald, & Rosen (1957) によると、成功することがむずかしいと考えられている仕事ほど、より大きな威光と高い給与が与えられている。しかし、これらの場合、成功の誘因価として評価されているのはいわゆる誇りの感情ではなく、この点には注意が必要であろう (Weiner, 1980a)。

以上の三つの仮定をまとめると、次のようになる。

まず、

$$T_A = T_s - T_{AF}$$

これに、 $T_s = (M_s \times P_s \times I_s)$ 、 $T_{AF} = (M_{AF} \times P_f \times I_f)$  を代入すると、

$$T_A = (M_s \times P_s \times I_s) - (M_{AF} \times P_f \times I_f)$$

さらに、 $I_s = 1 - P_s$ 、 $I_f = 1 - P_f$  を代入すると、

$$T_A = [M_s \times P_s \times (1 - P_s)] - [M_{AF} \times P_f \times (1 - P_f)]$$

ただし、 $P_s + P_f = 1$  であるから、 $P_f = 1 - P_s$ 。したがって、

これを代入すると、

$$T_A = [M_s \times P_s \times (1 - P_s)] - [M_{AF} \times (1 - P_s) \times P_s]$$

この式は変形して、次のように表すことができる。

$$T_A = (M_S - M_{AF}) \times [P_S \times (1 - P_S)]$$

このように、当初の式では四つあった状況変数 ( $P_S$ ,  $I_S$ ,  $P_f$ ,  $I_f$ ) の内、三つまでが  $P_S$  によって表現され、結果的に、 $T_A$  は二つの動機変数 ( $M_S$ ,  $M_{AF}$ ) と一つの状況変数 ( $P_S$ ) で表される。なお、 $P_S$  は、成功の主観的確率であるので、0 から 1 の範囲の値をとる。したがって、 $P_S \times (1 - P_S)$  が最大となるのは、 $P_S = .50$  の時であり、その値は .25 である。

このことから、達成動機づけについて、以下のような関係が導かれる。まず、 $M_S > M_{AF}$  の個人においては、合成された達成傾向  $T_A$  は正となり、 $P_S = .50$  の時に最大の値をとる。この傾向は  $M_S > M_{AF}$  の程度が大きいほど強められる。

次に、 $M_S = M_{AF}$  の個人においては、合成された達成傾向  $T_A$  は 0 となり、なんらかの外在的な動機づけ要因が関与しない限り、達成行動は生起しない。

また、 $M_S < M_{AF}$  の個人においては、合成された達成傾向  $T_A$  は負となり、失敗回避傾向が優勢となって、達成行動は差し控えられる。そして、その程度は、 $P_S = .50$  の時に最大である。したがって、この負の合成傾向よりも強いなんらかの外在的な動機づけ要因が関与しない限り、達成行動は生起しない。しかも、その場合に生じる達成行動の強さは、 $P_S = .50$  の時に最小となる。

Atkinson 理論の概要は以上のようにまとめることができる。この内、Weiner 理論に継承されたものとしては、まず、達成動機づけを期待(主観的確率)×価値(誘因価)という枠組みで扱うという基本的考え方を挙げることができる。また、価値の具体的内容として、成功時の誇りと失敗時の恥を想定するという点も、Weiner 理論が Atkinson 理論から受け継いだ重要な特質である。

一方、Atkinson 理論において仮定されている期待と価値の相補的關係が、Weiner 理論では仮定されておらず、この点では両者は大きく異なる。また、Atkinson 理論では、期待と価値が相乗的に影響を及ぼしあって行動を動機づけると考えるが、Weiner はその点を明確にしていない(速水, 1991)。さら

に、Atkinson 理論では、Lewin ら (1944) や Miller (1944) の流れを汲み、成功への接近と失敗からの回避の葛藤という観点から動機づけをとらえる。これに対して、Weiner では、成功接近と失敗回避を特に分離して扱わないなどの点でも違いがあるとされる (稲木, 1978)。

## 1-2 Heider の原因帰属理論

原因帰属の心理学的意味に注目し、帰属過程の解明の重要性を最初に指摘したのは、Heider (1944, 1958) であった。彼がとる特徴的な研究上の立場は、“素朴心理学”と呼ばれる。すなわち、心理学研究は、いわゆる科学的方法にのみたよっていては不十分であり、市井一般の人々が人間の行動をどのようにとらえているかを分析し、それを科学の用語に翻訳し一般化することが必要であるというものである。その際、人々が日常的に行っている帰属という行為を分析することからも、重要な洞察が数多く得られると考えられる。なお、Heider による帰属過程の分析は非常に広範囲に及ぶものであるため、ここでは、Weiner 理論の解釈に関連が深いと考えられる側面を中心に、理論の概略を述べることにする。

まず、Heider (1958) は、市井一般の人々にとって、帰属という行為がどのような意味を持っているかについて述べる。Heider によると、人が実在を把握し、それを予測したり規制したりすることができるのは、次のようなメカニズムによる。

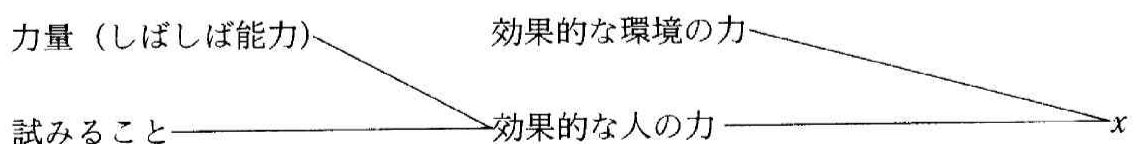
人は、うつろいやすく変化する行動や出来事についての観察結果をもとに、その背後にその行動や出来事を生起せしめている比較的变化しない安定な要因を推測する。そして、行動や出来事とその要因との間に因果的関係があると考えるのである。人は、自分を取り巻く観察可能なものをただ記録するだけでは満足しない。人は、それをできるだけ自分の環境の不変性、安定性に帰したいと思う。この欲求によって発動される認知過程が帰属過程である。そしてその際、人は観察された行動や出来事を、なんらかの安定な要因に帰

属しようと自分の環境内を探索する。認知された因果構造における、この多少とも安定し、予測可能でかつ統制可能な世界の存在を可能ならしめるような不変性のことを、彼は素因的特質 (dispositional properties) と呼ぶ。帰属過程の分析における素因的特質という概念の持つ含意は、次のような例によく表されている。「例えば、ジョンの成績(これは比較的一時的な出来事である)を多少とも永続的な特質である彼の高い知能のせいだと考えれば、彼のよい評価は理解できるし、そうすれば彼が大学での学業をうまくやっていけるだろうと予測しても安全だ、と我々は信じるのである」(Heider, 1958)。このように、ある出来事の原因が素因的特質に帰された場合には、その観察者は以前と比べ、より環境を一貫したものとして把握でき、予測し制御できるようになるのである。

次に Heider は、素朴心理学の観点から、行為の結果に影響を与えている要因について分析を進めていく。素朴心理学においては、科学的心理学と同じく、行為の結果は二組の条件、すなわち個人内の諸要因と環境内の諸要因に依存すると考える。これは、次のように表すことができる。

$$x=f(\text{効果的な人の力, 効果的な環境の力})$$

この式は、行為の結果  $x$  は効果的な人の力と効果的な環境の力の組合わせ、より具体的には両者の加算的關係に依存するとの洞察を表している。さらに、効果的な人の力は二つの寄与要因、すなわち、主に能力(ability)を指す力量(power)の要因と、“試みること(trying)”を意味する動機づけ要因に分解される。これらは次のように図式化される。



あるいは、

$$x=f(\text{試みること, 力量, 環境})$$

ここで、力量と“試みること”は乗算的結合関係にあると考えられる。例

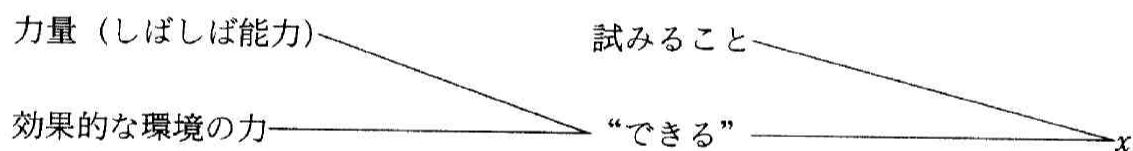


えば、能力があっても全然試みなければ、彼は目標に向かってまったく前進しないからである。

ところで、行為者の力量に関する知識が得られたからといって、それだけで、試みられた行為が成し遂げられ得るかどうかの判断を行うことはできない。行為者の力量は、課題の困難度という環境内の要因との相対的關係で評価される必要がある。そこで Heider は、課題の困難度に代表される効果的な環境の力と力量の關係を表すものとして“できる (can)”を概念化した。“できる”は、次のように定式化される。

“できる” =  $f$  (力量ないしは能力—環境的諸要因の困難さ)

“できる”は、潜在的な可能状態、すなわち、その人がやろうと思えばその課題が成し遂げられる状態にあるかどうかを問う概念であると言える。人がこの“できる”の状態にあるかどうかと、彼がそれを成し遂げるように試みかどうかは、非常に異なったものだと考えられよう。この観点から見ると、行為の結果  $x$  をめぐる上記の図式は、次のように再表現される。



あるいは、

$x = f$  (試みること, “できる”)

このように、結果には影響するが、動機づけの要因すなわち人の“試みる”には帰されないすべての比較的安定な要因は、一括して“できる”の要因となるのである。なお、行為の実現可能性に影響する環境内の不安定な要因としては、好機 (opportunity) と運 (luck) が、その代表的なものである。

一方、“試みる”は、方向的側面と量的側面を持っている。通常、この方向的側面は意図 (intention) と呼ばれ、量的側面は努力 (exertion) と呼ばれている。Heider は、その行為が行為者の意図によって導かれたものか否

かという観点が、行為の解釈において非常に重要であると考えられる。個人  $p$  が意図的に行為の結果  $x$  を引き起こす場合、その関係性は、人称的因果性 (personal causality) と呼ばれる。これに対し、 $p$  が無意図的に、ただ彼の物理的ないしは社会的存在が環境に対してある影響を与えたために、結果  $x$  を生じさせる場合、その関係性は非人称的因果性 (impersonal causality) と呼ばれる。たとえば、同じ結果  $x$  の生起が観察されたとしても、それが  $p$  の意図に起因するものであるか否かによって、その出来事の解釈は大きく異なる。例えば、ある行為が他者に損害を与えたとしても、その行為が無意図的なものであったと見なされた場合には、意図的な原因によると見なされる場合よりも、彼には責任がないと考えられやすい。

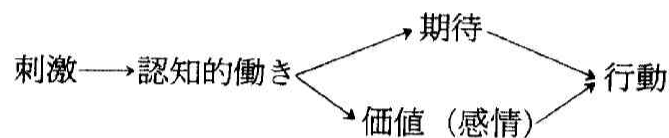
以上述べてきたように、Heider の分析は、ある人の行為がなんらかの結果を生じさせることを観察した時の我々の心のはたらきを、できる限り日常的な言葉や概念によって理解しようという試みであった。彼は、ある人の行為が意図的なものなのか、無意図的なものなのか、その結果を生じさせた原因はその人の側にあるのか、それとも環境の側にあるのか、またその原因は素因的特質を有しているのか等、様々な観点から帰属過程を扱ったのである。

Weiner は、Heider の分析における三つの概念に注目し、それらを帰属因の分類及び帰属から導かれる予測の定式化に用いたと考えられる。三つの概念とは、素因的特質、人 - 環境 (効果的な人の力、効果的な環境の力)、人称的因果性あるいはそれを支えている意図である。次節で述べるように、Weiner (1979) は、達成場面における典型的な八つの帰属因を三つの原因次元 (causal dimension) という理論的視座から分類する。三つの原因次元は、それぞれ原因の位置 (locus of causality) 次元、安定性 (stability) 次元、統制可能性 (controllability) 次元と呼ばれる。そして、これらはそれぞれ、Heider の人 - 環境、素因的特質、人称的因果性ないしは意図と密接な関連を持っている。



## 2 Weiner 理論の基本的枠組み

Weiner 理論も多くの動機づけの認知理論と同じく、期待×価値モデルをその基礎を持つ。期待×価値モデルには、Atkinson 理論も含め、TABLE 1 に示したような多様な理論的立場を含めることができる。そして、それらに共通な一般図式として、次のように表現することができる。



期待×価値モデルでは、ある方向に行動しようとする傾向の強さは、その行動によって一定の結果（または目標）が得られるという期待の強さと、その結果（目標）がその個人に対して持つ価値の高さ（その具体的内容としてしばしば感情が用いられる）とによって決まると考える。そして、期待の強さと価値の高さは、有機体が刺激をどのように認知的に処理するかに全面的に依存するとされる。したがって、この図式は、刺激は、行動とは無関係ではないが、それ自体が直接に行動を規定するのではなく、有機体によって能動的に処理される情報の一つと見なす、という立場を含意している。また、この図式は、動機づけの認知理論が二つの段階、すなわち有機体が刺激を処理しなんらかの認知像を形成する段階と、その認知像が最終的行動をあるシ

TABLE 1 動機づけの期待×価値モデル

(Atkinson & Feather, 1966をもとに作成)

主張者	主な研究対象・領域	期待概念	価値概念
Tolman	動物の迷路学習	目標の期待	目標対象への要求
Lewin ら	社会的行動	潜在的可能性	誘意性
Atkinson	達成行動	期待, 主観的確率	動機×誘因 (感情)
Edwards	経済的意思決定	主観的確率	効用
Rotter	社会的行動, 不適応行動	期待	報酬価

ステマティックな様式で生み出していく段階を含む必要のあることをも示している。これは Baldwin (1969) の次のような記述に端的に表されている。「刺激状況によってはじまり、行動に導かれる一連の事象における第一の段階は、外界の認知像の構成であると行動の認知理論は仮定している。この認知像は、動機や情動を引き起こし、行動を目的や目標に導く効果的環境として作用する。」

確かに期待×価値モデルは、動物や人間の行動理解に対してより幅広い枠組みを提供し、多くの新たな実証的研究に示唆を与え続けてきた（林，1985）。しかし、従来の期待×価値モデルでは、期待及び価値がどのような認知的働きから生まれるかについては、十分に言及されていなかった。このことは、従来の期待×価値モデルが、有機体内に形成された認知像が行動に及ぼす影響の解明にもっぱらたずさわっており、刺激から認知像が形成される段階での有機体の処理メカニズムにはあまり注意をはらってこなかったことを意味する。これは、期待×価値モデルの枠組みで達成行動を取り扱う、Atkinson 理論にもあてはまる。

これに対し、Weiner ら (1971) は、結果に対してその原因をどのように推測するか、その認知処理のあり方が期待や価値を規定すると考え、この点を明確化した。事象の原因に関する因果的推論の過程が認知や行動に影響を及ぼすという考え方は、前述の Heider (1944, 1958) が提唱したもので、広く原因帰属理論と呼ばれる理論的立場である。Heider の思索自体は、実に多様な人間行動を包括的に説明しようという意図を持つものであったが、後継者の多くは、彼の着想を主に対人知覚の領域に適用して大きな成功を収めていた。したがって、Weiner がこれを本格的に動機づけ研究の分野に持ち込んだと考えられる。Weiner ら (1971) の「成功・失敗の原因に関する考え方 (belief) は、先行する刺激 - 個体間の情報処理と後続する個体 - 達成行動を媒介する」という仮説は、彼らが帰属過程を期待×価値モデルにおける認知的働きとして位置づけ、理論化を進めようとしたことを物語っている。なお、Weiner が

達成動機づけ研究に原因帰属を道具立てとして持込むことを思いついたのは、UCLA のある女子学生 (I.H. Frieze と推測される) との対話からであるらしい (Weiner, 1974)。

理論化に際して、まず Weiner & Kukla (1970) は、Heider (1958) の帰属理論と Rotter (1966) の社会的学習理論 (social learning theory) から、人が成功・失敗の説明に用いる主要な原因として、能力・努力・課題の困難度・運の 4 要因を抽出した。Weiner ら (1971) は、「人は達成に関連した事象の結果を解釈し、予測するために、帰属の四つの要素を用いる」と考えた。次に彼らは、この 4 要因をより根底的な特質の観点から分析し、統制の位置 (locus of control) 次元と安定性次元と呼ばれる、二つの原因次元を設定した。原因次元とは、各帰属因を特徴づけ整理するための理論的視座の一種である。これら二つの原因次元による典型的な四つの帰属因の分類は、TABLE 2 のように表される。

統制の位置次元は、Rotter (1966) が提唱した統制の位置の概念に着想を得たとされるもの (Weiner et al., 1971) である。そこでは、その帰属因が基本的には物理的な意味で行為者の内部にあるか外部にあるかが問われる。能力と努力は行為者にとって内的 (internal) 要因であるのに対し、課題の困難度と運は環境的な要因であり、外的 (external) 要因と見なされる。統制の位置次元は、期待×価値モデルの“価値”に影響を与える次元として考察される。Weiner 理論では、価値の具体的内容として Atkinson (1964) にならって誇りと恥の感情を用いる。

**TABLE 2 達成行動において認知される  
原因の分類 (Weiner, 1972)**

安定性	統制の位置	
	内的	外的
安定	能力	課題の困難度
不安定	努力	運

そして、同じ成功や失敗をしても、それを内的要因に帰属するか外的要因に帰属するかで、誇りや恥の感じ方が異なってくると指摘する。例えば、成功したのは運のよさによると考えるよりも、自分の努力の賜物であると考えの方が誇らしさを強く感じるだろう。また、失敗を課題の難しさに帰属するよりも、自分の能力不足のせいだと考える方が恥かしさをより強く感じるであろう。

この次元は、Rotter の命名をそのまま受け継ぎ、統制の位置次元と呼ばれるが、実際には両者には違いがある。Weiner は、この次元を、その帰属因が物理的な意味で行為者の内にあるか外にあるかということを問う帰属因の分類概念として用いる。これに対し Rotter は、自分の反応とそれに伴う強化の随伴性の観点から統制の位置の概念を提唱し、内的 - 外的次元を設定した。統制の位置が内的であるというのは、個人内の特性ないしは行動と強化が随伴している状態を指す。一方、統制の位置が外的であるというのは、個人外の特性ないしは行動と強化が随伴していることを意味する。したがって、Weiner が言うように“努力”が帰属因として、すなわち“努力すること自体”を、行為者が内的であると見たとしても、当該事態における結果が“努力”と随伴しており、行為者が“努力”によって結果を自らの統制下に置くことができると認知するかどうかはまた別の問題であろう。この違いは、後年、期待の規定因をめぐる論争を生むことになる (Weiner, Nierenberg & Goldstein, 1976)。むしろ、Weiner が当初、内的 - 外的という次元によって意図した分類は、Heider (1958) によって、人 - 環境という用語でなされた分類に相当する。

もう一つの原因次元である安定性次元は、帰属因の時間的安定性・変動性に着目した次元である。能力と課題の困難度は、時間的安定性・変動性の観点から見た場合、比較的变化しにくい安定な要因と言える。これに対し、努力と運は、その時々によって変化し得る不安定な要因と見なされる。安定性次元は、期待×価値モデルの“期待”に影響を与える次元として考察される。

Weiner ら (1971) によると、同じ成功・失敗に直面しても、それを安定的な要因に帰属するか、不安定的な要因に帰属するかで、将来の類似課題における成功への期待は大きく異なってくる。成功・失敗を能力や課題の困難度のような安定的要因に帰属すると、次回においても事情はあまり変わらないので、今回と同じような結果になると期待するだろう。したがって、その成功・失敗によってもたらされる期待の変動量 (expectancy shift) は大きい。しかし、努力や運といった不安定な要因に帰属すると、次回は努力すればよいとか運が変わってしまうかもしれないと考えることによって、今回とは異なった結果になるかもしれないと予想するであろう。したがって、期待の変動量は相対的に小さいものとなる。

Weiner が理論化にあたり期待と安定性次元を結びつけた背景には、帰属理論の伝統的な問題意識があったと思われる。そもそも帰属理論の問題意識は、その歴史的端緒である対人知覚領域での研究からもわかるように、観察された行動や行動の結果が行為者のパーソナリティのような安定した属性、Heider で言えば素因的特質に帰属されるか否かという点にあった。もし、ある行動が安定な属性に帰属されるならば、そこからその行動に対応したパーソナリティを観察者は推論することができる。その際、同様の行動や行動の結果が繰り返し観察される、すなわち弁別性 (distinctiveness) が低いならば、それはパーソナリティのような安定な属性への帰属を生みやすい (Orvis Cunningham & Kelley, 1975)。逆に言えば、安定した属性に帰属された行動や行動の結果は、それが将来の類似した状況下においても再現されるであろうという期待を観察者の中に生みやすいといえる。このことは、先に引用した Heider (1958) による記述からも十分うかがえる。

以上のように、Weiner 理論の二つの原因次元は、Heider ないしは彼のアイデアを継承し発展させた Kelley の洞察をベースとしたもの (Shaw & Costanzo, 1982) であり、しばしばなされる Rotter の統制の位置概念の多次元的发展という解釈は必ずしも適切とは言えない(ただ、Weiner 自身も特に初期



においてそのような叙述を行っており、そのことが理論解釈上の混乱の一因となっている。Weiner 理論の動機づけ研究史上の位置づけ、解釈とそれをめぐる論争については、奈須, 1989, 1990b を参照のこと)。まとめると、Weiner 理論は、Heider の帰属の考え方を、動機づけの認知理論の基本的パラダイムである期待×価値モデル、より特殊的には、Atkinson 理論の枠組みの中においたものと解釈できる。つまり、「成功・失敗という結果に対し、その原因をどう認知するかによって後続の行動での成功の期待や、喚起される感情が変わり、この期待と感情を媒介として後続の行動が決定される (Weiner et al., 1971)」というものである。この考え方は、先に示した期待×価値モデルの一般図式との対応で、次のように表現することができる。



なお、Weiner は、後年、この 4 要因の 2 原因次元からなるモデルの修正・発展を試みている (Weiner, 1979)。修正の最大の契機は、努力・能力・課題の困難度・運という四つの帰属因が、考え得る原因認知を包括的に表していないこと (Elig & Frieze, 1979)、したがって 4 要因をベースに考案された 2 次元による原因分類も、達成領域における帰属過程の分析概念として疑問の余地があるということであった。実際、帰属測定に自由記述を用いた研究は、Weiner が主に扱った学業達成領域においてさえも、4 要因以外の帰属因、例えば気分・体調や性格が用いられることを示している (Cooper & Burger, 1980)。また、同様の自由記述研究から、Frieze (1976) は、努力に関して安定的努力 (stable effort) と不安定な直接的努力 (immediate effort) の二つのカテゴリーを見出した。さらに、樋口・清水・鎌原 (1979) は、Rotter の統制の位置との関連で Weiner の 4 要因を検討し、Rotter の powerful others への帰属をどこに位置づけたらよいのか不明であるとの疑問を提出している。



この問題への対処は、帰属因の特徴づけに用いる原因次元の数を増やし、分類をより精緻化するという試みによって開始された。Rosenbaum (1972) によると、努力と気分 (mood) は両方とも内的で不安定的な要因であるが、この二つは明らかに異なる。彼は、この違いを説明するために意図性 (intentionality) 次元を考案し、努力を意図的要因、気分を無意図的要因として分類した (TABLE 3 参照)。さらに、意図性次元の導入により、教師の指導・援助のような他者の努力の要因を、課題の困難度や運と分離して扱うことができるようになった (Weiner, 1974)。また、この原因分類は、努力や能力を、その安定的属性と不安定的属性に分けて扱い得る点でも評価できよう。

この Rosenbaum (1972) の試みを受けて、Weiner (1979) は、同様の 3 次元 8 要因からなるモデルを定式化した。Weiner によると、Rosenbaum が見出した次元は統制可能性次元と呼ぶべきものであり、Rosenbaum は次元の命名を誤っていた。努力不足に帰属された失敗は、失敗する意図があった (故意に失敗した) ことを意味するのではない。むしろ、努力は統制可能、気分は統制不可能として分類するのが適当であると Weiner は考え、統制可能性次元を第 3 の原因次元として設定した。同時に彼は、統制の位置次元を原因の位置次元と命名し直した。先に述べた Rotter の統制の位置との違いを明瞭にし、統制 (control) の持つニュアンスをこの概念から払拭しようとしたのである。その上で、原因の位置、安定性、統制可能性の 3 次元による原因分類を行った (TABLE 4)。統制可能性次元は、次節で述べるように怒り

TABLE 3 成功・失敗の認知された原因の 3 次元分類 (Rosenbaum, 1972)

	意図的		無意図的	
	安定	不安定	安定	不安定
内的	自己の安定な努力	自己の不安定な努力	自己の能力	自己の疲労・気分技能のぶれ
外的	他者の安定な努力	他者の不安定な努力	他者の能力 課題の困難度	他者の疲労・気分技能のぶれ・運

TABLE 4 原因の位置・安定性・統制可能性次元の組合わせによる  
成功・失敗の認知の決定因 (Weiner, 1979)

	統制可能		統制不可能	
	安 定	不安定	安 定	不安定
内的	ふだんの努力	一時的な努力	能 力	気 分
外的	教師の偏見	他者の日常的 でない努力	課題の困難度	運

(anger) やうしろめたさ (guilt), あわれみ・同情 (pity, sympathy) などの感情喚起に影響を与えるとされる。また, Weiner 理論は, 達成領域を中心に展開されてきたが, 80年以降, 援助行動の理解などにもその適用範囲を広げる試みがなされており, そこではこの統制可能性次元が, 理論構成の中核を担うこととなる (Weiner, 1980b, 1980c, 1986)。

なお, このようないきさつを持つ Weiner 理論の統制可能性概念は, 同じく統制可能性概念を理論構成の中核に据える Rotter や Seligman (1975), Bandura (1977), Langer (1983) のそれとは異なる性格を持つ。また, それゆえの研究者間での誤解や混乱もしばしば見受けられる。まとめると, Weiner 理論における統制可能性概念とは, ①当該の結果を自身の反応によって統制できるか否かを問うものではなく帰属因の性質に関するものであって, ②行為者のみならず教師や家族, 友人といった他者にとっての帰属因の統制可能性をも問題にする概念であると言える。ここで特に注意すべきは, 外的で統制可能というセルの存在である。これは, 例えば, 行動と結果の随伴性を問う Rotter や Seligman 流の統制可能性概念にそって考えれば, まさに奇妙な, 自己矛盾を含む言葉として映るであろう。さらには, Weiner 自身, 外的要因が統制可能かどうかは疑問である, という不可解な記述を行い, (Weiner, 1979), 誤解や混乱を助長したという経緯がある。実際, この点をめぐっては, 実証的な研究の計画・実施において誤解・混乱が認められる。

例えば, Forsyth & McMillan (1981) は, 試験成績への帰属を, 被験者

に直接に原因次元への評定を求める方法で測定し、次回の試験での成功期待及び16の感情評定との関係を検討した。その結果、感情は成績の高低、原因の位置次元とともに統制可能性次元とも関係があった。定期試験の成績の原因を統制可能であるとした時、よりポジティブな感情を強く感じる事が示されたのである。彼らの研究は期待についても統制可能性次元の影響を示しており、我国でも Weiner 理論に対する反証例としてしばしば引用されてきた（相川・川島・松本，1985；宮本，1983）。しかし，Forsyth & McMillan（1981）は，統制可能性次元の測定に際して「原因が自分にとって統制できるか，できないか」を尋ねている。これは，内的な統制可能要因（典型的には努力要因）とそれ以外の要因の対比を求めていると考えられ，Weiner（1979）が問題にしているものとは違うものを測定している。Hayamizu（1984）は，11の帰属因について当事者による統制可能性の程度を大学生に評定させた。そして，学校での学習態度，自宅での日々の努力，テスト前日の努力の三つの努力要因が非常に統制可能として，また，能力，興味，体調が中程度に統制可能として評定され，外的要因はすべて統制不可能とみられたことを報告している。Hayamizu（1984）はこの結果に基づき，原因の位置次元と統制可能性次元はオーバーラップしていると結論づけた。また，実際，Forsyth & McMillan（1981）の研究では，両次元間に.409の相関を得ている。しかし，Weiner のいう統制可能性概念の意味に即して研究が実施されたならば，結果はずいぶんと違っていたであろう。

Weiner 理論の第3の次元である統制可能性をめぐることは，このように若干の誤解や混乱が認められる。前述のように，Weiner 理論における統制可能性次元は，Rosenbaum の意図性次元の概念から生まれたものである。ちなみに，帰属過程について考察する際に意図性に注目するというアイデアは，前述のように，Heider（1958）によって導かれた。そしてそれは，後の多くの帰属理論（例えば Jones & Davis, 1965；Kelley, 1967）に引き継がれていく原因帰属研究における一つの伝統と言い得るものである。また，Heider は意

図の存在こそが“試みること”に人称的因果性という特徴を与え、行為の結果における行為者の責任性を高めるとしている。そして、Weiner 理論における統制可能性次元も、道徳的判断や行為の責任の知覚に関わるとされており (Weiner, 1986)、この点においても両者は対応している。したがって、この統制可能性という第3の次元もまた、Rotter の着想や他の動機づけ研究よりも、Heider の洞察との関連がより深い概念であると見なし得る。

### 3 Weiner 理論における達成関連感情の取り扱い

Weiner 理論は、前節で検討したように、期待×価値モデルの枠組み、より具体的には Atkinson 理論の枠組みを、Heider に端を発する原因帰属理論の観点から再解釈し、発展的に継承したものである。したがって、Weiner 理論における感情の位置づけは、Atkinson 理論と同じく、成功への期待とならぶ達成動機づけの主要な規定因というものである。また、Weiner が当初、達成関連感情に関して誇りと恥を主に扱っていたのも、彼が Atkinson 理論の伝統に身をおいていたことに起因する。Weiner 理論における達成関連感情の取扱いは、いくつかの論争を経て1977～1980年を転機として大きく変容していく。そして、それに伴い、Atkinson 理論から受け継いだこの二つの特質も若干の変質を余儀なくされていく。以下、Weiner 理論における達成関連感情の取り扱いの変化について概観する。

感情反応に関する Weiner 理論の当初の仮説 (Weiner et al., 1971; Weiner, 1972) は次の二つに集約されよう。

仮説1：感情反応は、成功・失敗に対して内的帰属がなされた時に最大となり、外的帰属がなされた時に最小となる。

仮説2：努力帰属の感情反応に対する影響は能力帰属の影響よりも大きい。

Weiner (1974) は、Nisbett & Schachter (1966), Ross, Rodin & Zimbardo (1969), Schachter & Singer (1962), Storms & Nisbett (1970) などを参

照し、仮説 1 の論拠の一部とした。しかし、これらはいわゆる錯誤帰属 (misattribution) の研究として、生理的喚起に関する原因認知の効果を検討したものであり、成功・失敗について仮説を直接に検証したものではない。達成行動を扱った研究としては、運帰属事態に比べて能力帰属事態の方が、成功・失敗ともに感情反応が大きいことを示した Feather (1967) や Meyer (1970) の研究がある。しかし、能力と運は原因の位置次元で異なると同時に安定性次元でも異なる特徴を有する帰属因であり、いずれの次元の効果であるかが特定できない。これに対し、Reimer (1975) は、大学生を対象に、ピアノのレッスンを課題とした実験を行った。課題での成功に対して努力・能力・課題の困難度・運の四つの帰属因を取り上げ、感情反応への影響を検討したのである。その結果、内的帰属 (努力・能力) 条件下において感情反応の大きいことが示された。また、Ruble, Parsons & Ross (1976) の第 1 実験でも、6～11 歳児について、内的帰属をもたらすような条件の下で感情反応が大きいことが見出されている。仮説 1 を直接扱った実験的研究は意外と少なく、なされた研究も帰属の操作や感情の指標、被験者集団の年齢段階などがまちまちであり、必ずしも十分な証左とは言い難い。しかし、仮説 1 はそれが直観的にもっともらしいこともあってか、初期においてはあまり批判の対象とはならなかった。むしろ、多くの研究者の疑問や批判の声は仮説 2 に集中し、そこでの議論が仮説 1 をも含む理論全体の修正を促していった感がある。

Weiner & Kukla (1970) は、教師役の被験者に生徒の努力・能力及び試験での成績に関する情報をもとに、仮想の生徒に報酬・罰を与えさせるという実験を行った。そして、高い努力は高い能力よりも賞賛され、低い努力は低い能力よりも罰せられるという結果を得た。Weiner (1974) はこの結果をもって仮説 2 の証左としている。同様の実験結果は多くの研究で追認されている (Eswara, 1972 ; Rest, Nierenberg, Weiner, & Heckhausen, 1973 ; Weiner & Peter, 1973 ; Zander, Fuller & Armstrong, 1972 など) が、少な



くとも次の二つの理由において証左としては不十分であると考えられる。

- ① ほとんどの研究が、実際には指標として報酬・罰を用いているが、これらは誇りや恥の感情とは異なると考えられること。
- ② 当事者である生徒が自身を評価する場合と、他者である教師が評価する場合とでは、違った結果がもたらされる可能性があること。

これは、Covington & Beery (1976) の self-worth 理論の立場から考えても当然の批判であろう。教師は Weiner の主張するように努力に基づいた評価をするかもしれないが、高努力下での失敗は低能力を暗示することから、生徒の self-worth にとっては脅威となる。教師と生徒では、原因帰属の持つ意味合いや効果が違ってくるのである。

また、Nicholls (1976) は、将来への成功が高く価値づけられ、長期的目標に注意が向いているような課題状況では、安定的要因である能力への帰属の方が、将来も今回と同じ成功あるいは失敗を予測させるがゆえに、努力帰属の場合よりも感情反応が強くなると主張した。さらに、Sohn (1977) は、誇りや恥の感情は、人が最善を尽くしたか否かを問う道徳的判断に関わる感情であるがゆえに努力帰属と関連が深いのだと考えた。そして、うれしさや悲しさのような道徳的にニュートラルな感情を問題とすれば能力帰属の方が影響が大きいのではないかと考え、仮想場面を用いた実験でこれを実証した。

Weiner (1977) は、Sohn の批判への回答の中で、達成動機づけ研究は誇り・恥の次元で感情を扱ってきたが、達成場面で経験される感情が誇りと恥だけであるという証左は見あたらないとして、それ以外の様々な感情反応をも考察する必要のあることを論じた。この点に関して、Weiner 自身の記述をたどると、すでに1972年に達成場面での感情として誇り・恥以外の感情反応を扱う必要性についてふれられてはいる (Weiner, 1972)。しかし、その時点では、やはり誇りと恥が達成動機づけを考える上で最も重要な感情であるとし、理論の中にそれ以外の感情を組み入れるには至らなかった。この Sohn とのやりとりを受けて、Weiner ら (1978) は、大学生の被験者に原因帰属先を付



した仮想場面を提示し、達成に関連があるであろうとして辞書から抽出された約250の感情語が、その場面での感情経験としてどれくらいあてはまるかを評定させた。さらに翌年には、被験者自身の経験の回想を用い、追試を試みている (Weiner et al., 1979)。

彼らは実験結果から、成功・失敗に対して喚起される感情には、主に成功・失敗の経験そのものによって規定され、原因帰属の影響をあまり受けない感情 (結果依存の感情) と、原因帰属のあり方によって主に規定される感情 (帰属依存の感情) の2種類があると結論づけた (TABLE 5, 6 参照)。例えば、成功時のうれしさやよろこび、失敗時の悲しさや落胆などは、帰属先がどのようなものであれ、成功あるいは失敗という結果に対する主観的評価に依存して、喚起されるであろう。これに対し、同じ失敗を経験しても、それを自身の能力や適性のなさに帰属すれば無能感やあきらめを強く感じ、逆に教師の不熱心さに帰属すれば、怒りの気持ちが起こってくるであろう。また、

TABLE 5 成功場面における帰属依存の感情と結果依存の感情  
(Weiner et al., 1978, 1979をもとに作成)

帰 属	Weiner et al., 1978	Weiner et al., 1979
能 力	有能感 (competence) 自信 (confidence)	有能感 (competence) 誇り (pride)
短期的努力	快活 (activation) 高揚 (augmentation)	安堵 (relief) 満足 (satisfaction)
長期的努力	くつろぎ (relaxation)	満足 (contentment)
性 格	高揚 (self-enhancement)	—
他 者	感謝 (gratitude)	感謝 (gratitude, thankfulness) 興奮 (excitement)
運	おどろき (surprise)	おどろき (surprise) うしろめたさ (guilt) 安堵 (relief)
(結果依存)	うれしさ (happy) よろこび (pleased)	うれしさ (happiness)

TABLE 6 失敗場面における帰属依存の感情と結果依存の感情  
(Weiner et al., 1978, 1979をもとに作成)

帰属	Weiner et al., 1978	Weiner et al., 1979
能力	無能感 (incompetence)	無能感 (incompetence) あきらめ (resignation) 不幸 (unhappiness)
短期的努力	うしろめたさ (guilt) 恥 (shame)	恐れ (fear)
長期的努力	うしろめたさ (guilt) 恥 (shame)	うしろめたさ (guilt)
性格	あきらめ (resignation)	——
他者	攻撃 (aggression)	怒り (anger)
運	おどろき (surprise)	おどろき (surprise) 悲しい (sadness) ばかな (stupidity)
(結果依存)	楽しくない (uncheerful) 不愉快 (displeasure) 困惑 (upset)	落胆 (disappointment) 憂鬱 (depression) うんざり (disgust)

運のわるさに帰属すればそのような感情はあまり強く喚起されず、むしろおどろきを感じるかもしれない。

このような理論の修正・発展の試みの中で、当初、単に感情喚起を規定するとされた原因の位置(1979年の3次元モデルへの改訂以前は、統制の位置)次元の位置づけは、成功時の誇りや有能感、失敗時の恥など、自尊感情を規定する次元へと、自然に移行することになる。また、ほぼ同時期に新たに提唱された統制可能性次元が感情に及ぼす影響に関する仮説(Weiner, 1980b, 1980c, 1986)は、以下のようにまとめることができる。

怒り：怒りは、自己のネガティブな結果を他者にとって統制可能な要因に帰属した時に経験される。例えば、騒がしいルームメートによって勉強をじゃまされた場合がそうである。また、怒りは他者のネガティブな結果が、その本人にとって統制可能な状況下で引き起こされたことが観察された場合に

も喚起される。教師が生徒を最もきびしく叱るのは、生徒が努力不足の末に失敗した場合である。

感謝：感謝は、自己のポジティブな結果を他者にとって統制可能な要因に帰属した時に経験される。人は指導や援助に感謝の気持ちを感じるが、もしそれがその人の意思とは関係のない、なんらかの強制からなされたものであれば、感謝の気持ちは相対的に起りにくい。

うしろめたさ：うしろめたさの感情は、自分にとって統制可能な要因によってネガティブな結果を得た時に経験される。不十分な努力ゆえの失敗はうしろめたさの感情を引き出す。

あわれみ・同情：あわれみの感情や同情の念は、他者が不統制可能な条件のゆえに援助を必要としている、あるいはネガティブな状態にあるのを見た時に喚起される。他者のネガティブな結果に対する原因の統制可能性は、その結果が怒りを引き出すか、あわれみや同情を引き出すかに影響する。人は目の病気が理由で講義のノートをとれなかった学生に対して同情し、自分のノートを貸すという援助行動を起こしやすいが、海に遊びにいていたことが原因の学生には怒りをおぼえることさえあり、援助は差し控えられる (Weiner, 1980c)。

上述の二つの研究 (Weiner et al., 1978, 1979) と、それを契機とする理論の修正・発展の試みに触発された形で、達成場面での感情喚起に関する研究はその後盛んとなり、今日までにかなりの蓄積がなされてきている (相川ら, 1985; Covington & Omelich, 1979, 1984a, 1984b; Forsyth & McMillan, 1981; Graham, Doubleday & Guarino, 1984; Hayamizu, 1984; Higgings, Strauman & Klein, 1986; Meyer & Mulherin, 1980; McFarland & Ross, 1982; McMillan & Spratt, 1983; 奈須, 1990a, 1994; 奈須・堀野, 1991; 丹羽, 1989; Russell & McAuley, 1986; Smith & Kluegel, 1982; Weiner & Litman-Adizes, 1980; Weiner, Graham & Chandler, 1982など)。そして、これら達成関連感情の研究群は、Weiner 理論の影響の下でなされたもの

がほとんどである。

このように、仮説2をめぐる論争を経て、Weiner 理論における達成関連感情の取り扱いが大きく変容していった。まず、取り扱う感情の種類が、誇りと恥の二つから、代表的なものだけでも10程度と大きく増えてきている。また、それに伴い、達成関連感情を、その喚起の認知的規定因の観点から、結果依存と帰属依存の二つに分類する視座を提案している。さらに、Weiner はその少し後になって、感情の持つ動機づけ機能を以前よりもいっそう重視する立場を表明する。当初の認知（期待）と感情が並列的に行動に影響を与えるという図式（これは期待×価値モデルの一般図式でもある）から、行動を直接規定しているのは感情であり、原因帰属や期待などの認知変数は、基本的には感情を媒介として行動に影響を与えるという見解をとるようになるのである（Weiner, 1980d）。

Weiner 理論は、そもそも達成動機づけの理論として構築されたものであり、感情はその構成要素の一つにすぎなかった。しかし、ここに至って彼の理論構成における感情の役割は非常に大きなものとなった。と同時に、Atkinson 理論の伝統からの実質的離脱もかなり明瞭になったと考えられる。今日の Weiner 理論は、動機づけと感情という、関連はあるがある程度独立した二つの問題を複眼的に取り扱うものとなっている。そして、感情の喚起機構に関する部分については、Schachter 理論の発展と見なした方が理解しやすい。また、動機づけの対象領域も達成のみならず援助や親和へと広げられており、すでに達成動機づけに限定された理論とは考えにくい。これらのことは、Weiner 自身が、80年代の半ばから、自らの理論を「動機づけと感情の帰属理論（An attributional theory of motivation and emotion）」と呼んでいる（Weiner, 1985, 1986）ことから明らかであろう。

## 4 お わ り に

以上の議論から、Weiner 理論の特質として、まったく異なる伝統を持つ二つの理論をベースとした複合理論であるという点がまず指摘できよう。そのひとつは Atkinson の達成動機づけ理論であり、もうひとつは Heider の原因帰属理論である。Weiner は Atkinson から、期待×価値モデルの枠組みと、価値の具体的内容として感情を用いるという二つのものを受け継いだ。一方、Heider からは、原因帰属という考え方そのものと、原因帰属を扱う際の二つの道具立て（人－環境、素因的特質）を継承した。前述のように、Weiner は期待×価値モデルの認知的はたらきに原因帰属を位置づけることにより二つの理論を複合せせるのだが、それが実に巧妙になされていることに注目したい。すなわち、達成場面で人が用いる四つの帰属因を、人－環境、素因的特質に対応した原因の位置、安定性の2次元で $2 \times 2$ の構造に整理している点、さらにこの2次元が、達成行動を規定する二つの要素である価値（感情）と期待を左右するとした点である。特にこの後者のアイデアによって、Atkinson 理論と Heider 理論の複合が成立したのである。なお、Weiner 理論は、しばしば「達成動機づけの原因帰属理論」と称されるが、これは達成動機づけという領域ないしは現象を、原因帰属という分析枠組みないしは理論負荷を持って論じようとした Weiner のアイデアをよく表していると言えよう。

そして、複合理論であるがゆえの誤解や、それに起因した論争、混乱も多かった。Rotter の統制の位置に代表される、自身の行動による結果ないしは強化の統制可能性を核とした理論構成は、今日の動機づけ理論における主要な流れのひとつである。そこで用いられる統制可能性が当事者の内にあるか外にあるかといった分類は、ある意味で原因帰属的特質をも有する。そして、この概念は原因帰属理論における人－環境と類似であり、またある場合には同方向の予測をもたらすため、しばしば同じものと見なされてきた。しかし、

帰属因の分類概念としての人-環境と、統制の位置の内的-外的とは本来的に異なるものである。Weiner は、このような基盤を持つ動機づけ研究の領域において、Heider の帰属理論を導入した理論構成を行ったのである。彼の枠組みはかなり Heider に忠実なものであり、それは Rotter をはじめとする統制可能性の理論とは一線を画すものであった。しかし、期待概念や内的-外的次元の概念、統制可能性の概念をめぐって、両理論間での異同が明確に語られることは少なく、誤解や混乱は実際の実証的研究においても拡大するばかりであった。これは、一方では Weiner 理論の複合性に起因するものであり、もう一方では理論解釈よりも実験や調査を研究作業として優先するという風潮によるものと推測される。本論で例示したような無用な誤解や混乱をさけるためにも、周到的な理論解釈や理論批判が、心理学研究としてその重要性を認知される必要があろう。

また、異なる二つの理論を巧妙に接続し複合させたということを、Weiner 理論の主要な特質とする視点からすれば、達成関連感情をめぐる近年の展開は、現象に対する説明力と引き換えに理論が持っていた単純にして巧妙という特性を損うものと評価せざるを得ない。なによりも、原因の位置次元の持つ意味が不明瞭となった。さらにそれは、原因の位置→感情、安定性→期待というシンメトリックな図式をもくずした。むしろ達成関連感情の理論としては、次元にこだわらず、個々の帰属因レベルで感情との関連を検討した方が、かえってシンプルで了解しやすい（この方向で研究を進めたものとして、奈須，1994）。しかし、Weiner はあくまで次元に基づく理論構成にこだわっている（Weiner, 1993）。現象に対する説明力を上げるべく新たな変数を導入して理論を修正したために、理論としての単純さやアイデアのみごとさなどが損われてしまうことは、どんな研究分野においても、しばしば認められるところではある。Weiner 理論と同じ動機づけの分野においても、Seligman (1975) の学習性無力感理論が、1978年の改定（Abramson, Seligman & Teasdale, 1978）によって、その適用範囲の向上と引き換えに当初のエレガン



トさを失ったと指摘する識者は多い。このような事実は、心理学理論がどのような基準のもとに構成され、修正されるべきかに関して、十分な議論がなされる必要性を示すものと解釈されよう。

---

## 引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P. & Teasdale, J. 1978 Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- 相川充・川島勝正・松本卓三 1985 原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響——Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討——教育心理学研究, 33, 195-204.
- Atkinson, J.W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, New Jersey : Van Nostrand.
- Atkinson, J.W. & Feather, N.T. 1966 *A theory of achievement motivation*. New York : Wiley.
- Baldwin, A.L. 1969 A cognitive theory of socialization. In D.A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Chicago : Rand McNally.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Cooper, H.M. & Burger, J.M. 1980 How teachers explain students' academic performance : A categorization of free response academic attributions. *American Educational Research Journal*, 17, 95-109.
- Covington, M.V. & Beery, R. 1976 *Self-worth and school learning*. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Covington, M.V. & Omelich, C.L. 1979 Are causal attribution causal? A path analysis of the cognitive model of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1487-1504.
- Covington, M.V. & Omelich, C.L. 1984a Controversies or consistencies? a reply to Brown and Weiner. *Journal of Educational Psychology*, 76, 159-168.

- Covington, M.V. & Omelich, C.L. 1984b An empirical examination of Weiner's critique of attributional research. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 1214-1225.
- Erig, T.W. & Frieze, I. H. 1979 Measuring causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 621-634.
- Eswara, H.S. 1972 Administration of rewards and punishment in relation to ability, effort and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 139-140.
- Feather, N.T. 1967 Valence of outcome and expectation of success in relation to task difficulty and perceived locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7**, 372-386.
- Forsyth, D.H. & McMillan, J.H. 1981 Attributions, affect, and expectations : A test of Weiner's three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology*, **73**, 393-403.
- Frieze, I.H. 1976 Causal attributions and information seeking to explain success and failure. *Journal of Research in Personality*, **10**, 293-305.
- Graham, S., Doubleday, C. & Guarino, P.A. 1984 The development of relations between perceived controllability and the emotion of pity, anger and guilt. *Child Development*, **55**, 561-565.
- Hayamizu, T. 1984 Changes in causal attributions on a term examination : Causal dimensions. *Japanese Psychological Research*, **26**, 1-11.
- 速水敏彦 1990 教室場面における達成動機づけの原因帰属理論 風間書房
- 速水敏彦 1991 原因帰属 宮本美沙子 編著 新・児童心理学講座第7巻 情緒と動機づけの発達 金子書房
- 林保 1985 動機づけの本質 教育と医学, **33**, 110-116.
- Heider, F. 1944 Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review*, **51**, 358-374.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York : Willey.
- Higgins, E.T., Strauman, T. & Klein, R. 1986 Standards and the process of self-evaluation : Multiple affects from multiple stages. In R.M. Sorrentino., & E.T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition* :

- Foundations of social behavior*. New York : The Guilford Press.
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 1979 Locus of Controlに関する文献的研究  
東京工業大学人文論叢, 5, 95-132.
- 広瀬幸雄・石井徹・木村昌幸・北田隆 1982 達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 22, 27-36.
- 稲木哲郎 1978 Weinerの達成動機づけ理論について 心理学評論, 21, 110-126.
- Jones, E.E. & Davis, K.E. 1965 From acts to dispositions : The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 2. New York : Academic Press.
- Kelley, H.H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.), *Nebraska symposium on motivation (Vol. 15)*. Lincoln : University of Nebraska Press.
- Langer, E. 1983 *The psychology of control*. Beverly Hills. CA : Sage.
- Lewin, K., Dembo, T., Festinger, L. & Sears, P.S. 1944 Level of aspiration. In J. McV. Hunt (Ed.), *Personality and the behavioral disorders (Vol. 1)*. New York : Ronald Press.
- Mandler, G. & Sarason, S.B. 1952 A study of anxiety and learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 166-173.
- McClelland, D.C., Atkinson, J.W., Clark, R.A. & Lowell, E.L. 1953 *The achievement motive*. Appleton-Century.
- McFarland, C. & Ross, M. 1982 Impact of causal attributions on affective reactions of success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 937-946.
- McMillan, J.H. & Spratt, K.F. 1983 Achievement outcome, task importance and effort as determinants of student affect. *British Journal of Educational Psychology*, 53, 24-31.
- Meyer, W.U. 1970 Selbstverantwortlichkeit und leistungsmotivation. Unpublished Ph. D. dissertation. Ruhr Universität, Bochum, Germany.
- Miller, N.E. 1944 Experimental studies of conflict. In J. McV. Hunt (Ed.), *Personality and the behavioral disorders (Vol. 1)*. New York : Ronald.
- 宮本美沙子 1983 達成動機と原因帰属 サイコロジー, 39-6, 20-25.

- 奈須正裕 1989 Weinerの達成動機づけに関する帰属理論についての研究 教育心理学研究, **37**, 84-95.
- 奈須正裕 1990a 学業達成場面における原因帰属, 感情, 学習行動の関係 教育心理学研究, **38**, 17-25.
- 奈須正裕 1990b 達成動機づけ理論の現状とその問題点——伝統性に注目して—— 異常行動 (PBD) 研究会誌, **29**, 23-38.
- 奈須正裕 1994 達成関連感情の認知的規定因, 動機づけ機能, 構造 未公開博士論文 (東京大学)
- 奈須正裕・堀野緑 1991 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, **39**, 332-340.
- Nicholls, J.G. 1976 Effort is virtuous, but it's better to have ability: Evaluative responses to perceptions of effort and ability. *Journal of Research in Personality*, **10**, 306-315.
- Nisbette, R.E. & Schachter, S. 1968 Cognitive manipulation of pain. *Journal of Experimental Social Psychology*, **2**, 227-236.
- 丹羽洋子 1989 児童の達成における原因帰属——感情反応について—— 教育心理学研究, **37**, 11-19.
- Orvis, B.R., Cunningham, J.D. & Kelley, H.H. 1975 A closer examination of causal inference: The role of consensus, distinctiveness and consistency information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 776-783.
- Reimer, B.S. 1975 Influence of causal beliefs on affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 1163-1167.
- Rest, S., Nierenberg, R., Weiner, B. & Heckhausen, H. 1973 Further evidence concerning the effects of perceptions of effort and ability on achievement evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **28**, 187-191.
- Rosenbaum, R.M. 1972 A dimensional analysis of the perceived causes of success and failure. Unpublished Ph. D dissertation, U.C.L.A.
- Ross, L., Rodin, J. & Zimbardo, P.G. 1969 Toward an attribution therapy: The reduction of fear through induced cognitive-emotional misattribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 279-288.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancy for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.

- Ruble, D.N., Parsons, J.E. & Ross, J. 1976 Self-evaluative responses of children in an achievement setting. *Child Development*, **47**, 990-997.
- Russell, D. & McAuley, E. 1986 Causal attributions, causal dimensions and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1174-1185.
- Schachter, S. & Singer, J.E. 1962 Cognitive, social and psychological determinants of emotional state. *Psychological Review*, **69**, 379-399.
- Seligman, M.E.P. 1975 *Helplessness : On depression, development and death*. San Francisco : W.H. Freeman.
- Shaw, M.E. & Costanzo, P.R. 1982 *Theories of social psychology, 2nd ed.* McGraw-Hill.
- Smith, E.P. & Kluegel, J.R. 1982 Cognitive and social bases of emotional experience : Outcome, attribution and affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1129-1141.
- Sohn, D. 1977 Affect-generating powers of effort and ability self attributions of academic success and failure. *Journal of Educational Psychology*, **69**, 500-505.
- Storms, M.D. & Nisbett, R.E. 1970 Insomnia and the attribution process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 400-408.
- Strodtbeck, F.L., McDonald, M.R. & Rosen, B. 1957 Evaluations of occupations : A reflection of Jewish and Italian mobility differences. *American Sociological Review*, **22**, 546-553.
- Weiner, B. 1972 *Theories of motivation*. Chicago : Rand McNally.
- Weiner, B. 1974 *Achievement motivation and attribution theory*. Morristown, New Jersey : General Learning Press.
- Weiner, B. 1977 Attribution and affect : Comments on Sohn's critique. *Journal of Educational Psychology*, **69**, 506-511.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 3-25.
- Weiner, B. 1980a *Human motivation*. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Weiner, B. 1980b A cognitive (attributional) -emotional-action model of

- motivated behavior : An analysis of judgements of help-giving. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 186-200.
- Weiner, B. 1980c May I borrow your classnotes? An attributional analysis of judgements of help-giving in an achievement-related context. *Journal of Educational Psychology*, **72**, 676-681.
- Weiner, B. 1980d The role of affect in rational (attributional) approaches to human motivation. *Educational Researcher*, **9**, July-August, 4-11.
- Weiner, B. 1985 An attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, **92**, 548-573.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. New York. Springer-Verlag.
- Weiner, B. 1993 Personal communication.
- Weiner, B., Frieze, I.H., Kukla, A., Reed L., Rest, S. & Rosenbaum, R.M. 1971 Perceiving the causes of success and failure. In E.E. Jones., D. Kanouse., H.H. Kelley., R.E. Nisbett., S. Valins. & B. Weiner (Eds.), *Attribution : Perceiving the causes of behavior*. Morristown, New Jersey : General Learning Press.
- Weiner, B., Graham, S. & Chandler, C.C. 1982 Pity, anger and guilt : An attributional analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **8**, 226-232.
- Weiner, B. & Kukla, A. 1970 An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 1-20.
- Weiner, B. & Litman-Adizes, T. 1980 An attributional, expectancy-value analysis of learned helplessness and depression. In J. Garber. & M.E.P. Seligman (Eds.), *Human helplessness*. New York : Academic Press.
- Weiner, B., Nierenberg, R. & Goldstein, M. 1976 Social learning (locus of control) versus attribution (unusual stability) interpretations of expectancy of success. *Journal of Personality*, **44**, 52-68.
- Weiner, B. & Peter, N. 1973 A cognitive developmental analysis of achievement and moral judgements. *Developmental Psychology*, **9**, 290-309.
- Weiner, B., Russell, D. & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In J. H. Harvey., W. J. Ickes., & R.F. Kidd (Eds.), *New*



*directions in attributional research* (Vol. 2). Hillsdale, New Jersey : Erlbaum.

Weiner, B., Russell, D. & Lerman, D. 1979 The cognition-emotion process in achievement-related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1211-1220.

Zander, A., Fuller, R. & Armstrong, W. 1972 Attributed pride or shame in group and self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **23**, 346-352.